

宮川健郎 私の出会った児童文学者たち 第2回

第1章 坪田譲治先生

その2 『びわの実学校』

坪田譲治先生（1890～1982年）には、子どものころに2度お目にかかったことがある。

桃とおまんじゅう

2023年4月19日昼ごろ、雨催いの岡山に到着した。私は、ふだんは東京で暮らしている。岡山まで、3時間あまりの新幹線の旅だった。

まず、駅前のホテルに荷物をあずけに行く。ホテルの前まで来て、気がついた。ホテルの面しているのは、「桃太郎大通り」というのだ。

「桃太郎大通り」から、桃を連想する。そして、毎年、桃の実る夏のころに、東京・豊島区の坪田譲治先生のお宅で岡山の桃を食べる会が開かれていたことを思い出す。母宮川ひろは「桃の会」といっていたが、お酒はまったく呑まないけれど、くだものが大好きだった母は、「桃の会」におじゃまするのを楽しみにしていた。（注1）

そういえば、駅のおみやげ屋さんには、「大手まんぢゅう」がならんでいた。これも、坪田先生のお宅にあった岡山の銘菓で、母は、「大手まんぢゅう」の話もよくしていた。母の晩年、施設に入る前の年に、妻がとりよせてくれて、家族で「大手まんぢゅう」を食べたこともあった。あんのつまった小ぶりのおまんじゅうは、とてもおいしいのだ。

桃とおまんじゅう——ここは、坪田譲治の町だ。

「小塔」

ノートルダム清心女子大学附属図書館のYさんとは、午後2時に約束していた。歩いても行かれるはずだが、道に迷わないように、駅でタクシーにのる。

古い高等女学校から発展したカトリック系の女子大学だ。Yさんに案内していただいて、図書館東棟の2階まで行った。ここで、ことしの6月まで「坪田譲治コレクション常設展示 2022年度 《没後40年記念展示》初公開！ 坪田譲治18歳の雑誌発表小説」が行われている（公開は基本的には大学内にかぎる）。

中央の書架に、坪田先生のその雑誌発表小説の誌面が展示されていた。2022年6月1日付の『山陽新聞』で、発見が大きく報道された短編「小塔」だ。掲載誌は、1908（明治41）年11月発行の『明治の女子』、日本YWCAの機関誌である。坪田先生は、「坪田城山」の筆名で発表している。発見したのは、この大学の日本語日本文学科教授の山根知子さんだ。これまでデビュー作とされてきた「若き友へ」（『北方文学』1912年6月）より4年も早い作品だという。

帰京してから、東京の図書館で、展示されていたのと同じ『明治の女子』の復刻版をさがして、「小塔」全編をあらためて読んでみた。3ページほどの小品で、書き出しは、「波はドーンドーンと淋しい音をくり返してゐる」。

波打ち際で、打ち上げられた木片をひろっては籠に入れている母子が登場する。母は40歳くらい、子は11、2歳。やがて、つかれてしまった子どもを待たせておいて、母は、仕事をつづける。子どもは、小石で塔をつくりはじめる。小石の大きなのを土台として四角にならべ、四角のなかに砂を入れる。まわりに石を積み上げては砂を入れた。少し高くなった塔のまわりに砂を盛り上げ、その上にまた石を積む。波が近寄ってきて、砂山のすそをくずしていく。次第に波は大きくなる。気がつけば、夕暮れだ。さびしくなった子どもは、石を投げすてて、少し走り、「お母あ」とさけぶ。

先の新聞記事には、「自らの世界に没頭する子どもとともに、大人の世界が対比的に描かれ、「文学における議治の基本的傾向がすでに現れている」という。」とある。これは、山根さんのコメントだろう。

新聞には、「城山」という筆名についても書かれている。「城山」は、坪田先生が旧制金川中学時代、文芸部で名のった号だという。——「少年時代に親しんだ岡山市の万成山や臥龍山の山城のほか、家族らに「譲さん」と呼ばれていたことにちなむと推察される。」それなら、「城山」は、「じょうざん」と濁らず、「じょうさん」と読むのか。東京の図書館で、掲載誌の裏表紙の英文目次をたしかめたが、A Little Tower……J. Tsubota. と書かれているだけで、「じょうさん」かどうかは、わからなかった。(注2)

坪田先生のもう一つの「風の中」

「坪田譲治コレクション常設展示」の書架には、坪田先生が主宰した童話雑誌『びわの実学校』の創刊号もあった。1963(昭和38)年10月の発行、坪田先生は73歳だった。先生は、隔月刊行のこの雑誌をどうしてはじめたのか。

戦後、日本の子どもの文学は、詩的、象徴的なことばで心象風景を描く短編の「童話」(小川未明の「赤い蠟燭と人魚」や宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」を思い出してほしい)から、もっと散文的なことばで、心のなかの景色ではなく、子どもという存在の外側に広がっている状況(社会)や、状況(社会)と子どもの関係を描く長編の「現代児童文学」へと転換する。長い戦争を敗戦のかたちで終わらせた日本の子どもの文学は、もう「戦争」や戦争を引き起こす「社会」を書かないわけにはいなくなってしまう。「戦争」や「社会」という新しい主題を書くためには、「童話」の方法ではなく、散文性の獲得がもとめられたのだ。(注3)「現代児童文学」が成立したのは、佐藤さとの『だれも知らない小さな国』(講談社)や、いぬいとみこの『木かげの家の小人たち』(中央公論社)が刊行された1959(昭和34)年だろう。二つの作品は、どちらも小人が登場する長編のファンタジーで、いずれも戦争体験を下じきになっている。

私は、もう20年くらい前から、日本の子どもの文学の大きな曲がり角について、こんなふうに語るようになった。ただ、これは、「童話」を克服して「現代児童文学」を出発させた側の文学史であるという自覚もある。もう一度相対化して考えたいと望んでもいるのだ。

「童話」の克服といったが、「現代児童文学」の成立をうながしたのは、1950年

代に起こった、大正期からの「童話」を批判的に検討する議論だった。私たちは、この議論を「童話伝統批判」と呼ぶが、その口火を切ったのが、早稲田大学の学生サークル「早大童話会」のマニフェスト「少年文学」の旗の下に！」だった。1953（昭和28）年9月に、サークルの機関誌『少年文学』に発表された。当時学生だった鳥越信が起草し、古田足日、神宮輝夫、山中恒らが参加した。「従来の「童話精神」によって立つ「児童文学」ではなくて、近代的「小説精神」を中核とする「少年文学」の道を選」ぶとした、この文章は、「少年文学宣言」と称されることも多い。

「少年文学」の旗の下に！」を深める評論を書きつづけたのが、1950年代の古田足日である。代表的な評論「さよなら未明—日本近代童話の本質—」（『現代児童文学論』くろしお出版1959年所収）では、小川未明らの童話を「近代人の心によみがえった呪術・呪文」であり、「未分化の児童文学」、つまり、十分に児童文学になっていないとして、浜田廣介や坪田譲治もあわせて批判した。

1960（昭和35）年に刊行された石井桃子らの『子どもと文学』（中央公論社）は、「子どもの文学はおもしろく、はっきりわかりやすく」という「世界的な児童文学の規準」（「はじめに」）にもとづいて近代日本の童話作家の6人の仕事を検討し、小川未明、浜田廣介、坪田譲治を否定的に、宮沢賢治、千葉省三、新美南吉を肯定的に評価した。

「童話伝統批判」の議論によって、坪田先生は、もう一つの「風の中」に立つことになった。先生は、「きく童謡・みる童話」（『朝日新聞』1960年9月21日）や、「童話今日の問題」正・続・完（『保育の手帖』1960年12月、61年1～2月）、「児童文学時事」上・下（『東京新聞』夕刊、1961年7月28～29日）（注4）を書いて、積極的に反論した。3回にわたった「童話今日の問題（完）」のしめくくりは、こうだ。

小川未明、浜田広介両先生は、吾国童話文学の国宝です。それについて、`子どもと文学`という本があらわれ、両先生の作品に、無理難題をふきかけました。黙っていては、吾国の童話が傷つくように思われ、至らぬながら、こんな文章を書きました。御判読いただきとう存じます。

「きく童謡・みる童話」には石井桃子が反論し（「子どもは歩む 坪田譲治さんにこたえる」『朝日新聞』1960年10月16日）、「童話今日の問題」については、藤田圭雄が「坪田先生へ」（『保育の手帖』1961年3月）という文章を書いて、『子どもと文学』を擁護する意見を述べた。坪田先生は、こうした「風の中」で、傷つけられた「童話」を守る場所として、新しい雑誌を構想したのではないか。

それでも、『びわの実学校』はおだやかに、しかし、意気込んで創刊された。先生のエッセイ「『びわの実学校』創刊まで」（『朝日新聞』1963年12月15日）は、前の年の夏に信州白馬岳の八方尾根にケーブルカーで登り、児童文学作家・評論家の関英雄さんとビールを呑む話からはじまる。

まず、ビールのセンをぬきました。雑誌の話が始ったのは、その時です。

「赤い鳥をお出しなさい」

関さんがそういったのです。

「そうです。赤い鳥を出しましょう」

私がいきました。何さま、標高二千メートルの山上ですから、二人とも、意気が上がっていたものと思われます。それから、約一年、私は、雑誌を出す出すと、友達にいいふらし、三、四度も集ってもらいました。そして、

「どんなものでしょう、子供がとびつくような、雑誌の魅力、何かありませんか」
そう、聞きました。(引用は『坪田譲治全集』12、新潮社 1978 年による)

坪田先生は、かつての『赤い鳥』(1918 年 7 月創刊)のような雑誌がほとんど一つもないことを述べて、「とにかく、面白くてたまらない童話雑誌をつくらなければ——思うことは、こればかりでした。」と書いている。

創刊のときの編集委員は、今西祐行、大川悦生、庄野英二、関英雄、前川康男、松谷みよ子の 6 人だった。あとになってから編集同人に加わったひとり、『さらばハイウェイ』(偕成社 1970 年)などの児童文学作家で評論家の砂田弘がこう書いている。

七十歳を越えた譲治自身も童話やエッセイを書いたが、もっとも力を入れたのは新人の発掘と育成で、同人たちは投稿作品に熱心に目を通した。(「坪田譲治をめぐる人びと」『国文学 解釈と鑑賞』1998 年 4 月)。

「童話」を守るために、坪田先生は、『びわの実学校』という場所で、どうしても新人作家を育てなければならなかった。その新人の第一が最初に「くましんし」が掲載された(第 13 号、1965 年 10 月)あまんきみこさんで、第二が最初に「たからもの」が掲載された(第 16 号、1966 年 5 月)宮川ひろだったと思う。

「わが師・わが友」

さて、ノートルダム清心女子大学附属図書館の「坪田譲治コレクション常設展示」では、坪田先生の書や写真、大学生のころの書簡なども、ゆっくり、じっくり見た。

展示コーナーを引きあげて、閲覧室のすみで少し休んでいると、会議を終えた村中李衣さんが現れた。坪田譲治文学賞受賞の『あららのはたけ』(石川えりこ絵、偕成社 2019 年)などの児童文学作家は、子どもの文化の研究者でもあり、この大学の児童学科の教授でもある。村中さんは、現在、附属図書館長だそうで、そのときまで図書館の会議に出席していたらしい。閲覧室で私がすわっていた近くのとびらから、不意に現れたのだ。村中さんとは、どちらも大学院生だったころからの知り合いだが、コロナ禍だったこともあって、数年ぶりの再会だった。

村中研究室でお茶をいただいていると、そこへ、授業を終えた山根知子さんが来てくださった。山根さんとは、山根さんが宮沢賢治を研究していた大学院生のころに会ったきりで、30 年ぶりくらいではないか。さっそく、展示を見たばかりの「小

塔」を発見した、いきさつについて聞く。

山根さんは、これも掲載誌が展示されている、坪田先生のエッセイ「わが師・わが友」(『新潮』1946年4月、9月)にある、題名のわからない坪田作品について、かねてから気にかけていた。エッセイには、坪田先生がまだ19歳で、小川未明のお宅をたずねるようになったころ、未明の前で二つの自作を朗読したことが書かれている。坪田先生がのちに「吾国童話文学の国宝」と書いた(「童話今日の問題(完)」前掲)ひとりの小川未明である。

未明は、「君、いい作品を書き給え、書けたら、僕に見せてくれ給え。」(引用は『坪田譲治全集』第12巻、1978年による。以下も同じ)といったという。――「私は感激して、早速二つばかり、まるで中学生の作文のようなもの、それも四、五枚のものを書いて、先生の教えを受けに持参した。」二つの作品の内容も簡単に記されているが、二つめについては、こう書かれている。

もう一つの作品は、これも何処とも知れない海岸で子供が砂山を作って遊んでいてその山も、次には子供も浪にさらわれてしまうという筋であった。

山根さんは、この二つめの作品と内容が一致する「小塔」を見つけ出すことになった(「小塔」では、子どもまでが波にさらわれたとはなっていないが)。「どことも知れない山中に入りくんだ湖があって、その中には沢山の島々などがある。その湖の中から不思議な船が現れて――」と内容が紹介されている、もう一つの作品も、どこかに発表されたのだろうか。

山根さんは、2022年に、日外アソシエーツの『人物書誌大系』の1冊として『坪田譲治』(鈴木榮一と共編)を刊行した。坪田譲治の全著作目録である。2604編の著作が確認されている。坪田先生の生前に3回刊行されている全集のうち、三つめの新潮社版全集全12巻に収録されているのは625編だという。

村中さんや山根さんと話しているうちに、今度は、山根さんと同じ日本語日本文学の教授である伊木洋さんも顔を見せてくださった。伊木さんとは、5年ほど前から、国語教育の学会で話をするようになった。村中さんとの共著に『はじめよう! ブックコミュニケーション』(金子書房2019年)がある。

翌日の4月20日は、朝、最初に、岡山駅に隣接する岡山市シティミュージアムに行き、そのあと、岡山市立中央図書館、岡山県立図書館、吉備路文学館とまわった。市立中央図書館の2階に坪田先生の書斎が復元されているなど、どの施設でも、坪田先生ゆかりのものを見ることが出来る。晴れて少し暑くなった岡山の町のあちこちで、坪田譲治に出会う。おしまいに岡山駅にもどって買った東京へのおみやげは、もちろん、「大手まんぢゅう」だ。(つづく)

(注)

- 1、水藤春夫作成「坪田譲治年譜」(『坪田譲治全集』12、新潮社1978年所収)の1959(昭和34)年(69歳)には、つぎのように書かれている。

八月、郷里岡山より名菓白桃を取りよせ、知人・友人らと賞味。以後「桃の会」と称して恒例になる。

- 2、坪田先生が菅忠道との対談（『坪田譲治童話全集』別巻『坪田譲治童話研究』岩崎書店 1971 年所収）で、この筆名のことを語っていることに気がついた。坪田先生は、大学を出たころ、巖谷小波をたずねたという。

（小波に一宮川注）「それで君の号は」と聞かれて、学校卒業してそれほど文学に熟達していないものだから、号、ペンネームなんてもっていないのです。ちょっと考えてみてもやっぱりペンネームみたいなものがあるようでないと信用にかかわると思って、譲治というのだから、城山（しろやま）と書いて「じょうざん」と読むことにして、城山（じょうざん）と申しますと言ったのです。そのころみんな号をもっていましたからね。そしたら「ああそうか、城山（じょうざん）というのか」と。（カッコ内はルビ）

坪田先生は、巖谷小波にたずねられて、とっさに、かつて名のっていた「城山」という号を思い出したのだろう。

- 3、古田足日に、「散文性のかく得」（『小さい仲間』1954 年 7 月）という評論がある。
- 4、上のタイトルは「未明童話を否定する作家たち」、下は「いぬいとみこの仕事について」である。